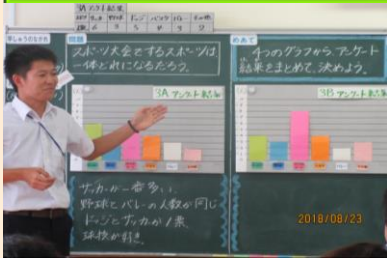


中部の算数・数学授業づくり — 子供に学ぶ楽しさを!! —

須崎市立多ノ郷小教材研究会



Report 14
H30. 8. 23



第3学年 「見やすく整理して表そう」 寺倉 凌治 教諭

教科書にある“けが調べ”ではなく、生データに挑戦したい!という授業者の強い思いのもと「データを活用して見いだしたことを表現する力を育む」ことを目指して取り組まれていました。教材研究を行うなかで、生データを扱う際には、個人の価値観に左右されないこと、数字を根拠にして考察できること、必然性があるかどうかという点を大切にしなければならぬということを実感されたようで、これらを意識した授業提案でした。

グループ協議では「本単元・本時でさらに考察する必然性をどう仕組んでいくか」という視点で話し合いが行われました。ここでは、「要因が一つなので考察しにくいのでは?」「グラフを1つにまとめるといった必要性がうすいのでは?」「最終的に自分達の生活に返していくことが必要」といった意見が参加者から出されました。



PPDAC を回すことの大切さと生データを扱う価値

通常の算数の授業では、1 単位時間の中に問題解決の過程が流れているが、統計学習は PPDAC のサイクルが強調されており、単元全体で考えることも 1 単位時間をどう捉えていくかということも大切だということ。生データを扱う際には、そのデータが学習展開や多面的な解釈に耐えうるものなのかを見極めなくてはならず、3 年生という発達段階で考えると、2つか3つぐらいの角度から分析できるデータにする必要があるということ。分析を行う際は、様々な異なる視点や立場で多面的に分析すること、「本当にこれでいいのかな」と妥当性をクリティカルに考察することが大切だということなどを教えていただきました。

齊藤一弥
学力向上総括
専門官による
指導板書



授業者の声

今回の教材研究会では、大きく2つの学びがあった。1 つ目は、問うべき問いは何かをきちんと考え、児童が「なるほど」「そうか」と思えないといけないということ。2 つ目は、D 領域のデータ分析では、異なる視点や立場で多面的に分析することと妥当性を批判的に考察することが大切であるということである。

参加者の声

単元構成をするに当たって、教師自身が多面的・多角的に捉え、子どもが考える必然性をもてるような仕掛けを考えていくことが大切だと思った。教材を設定する段階で、子どもが多面的に考えることができるかどうかを検討し、単元の中に位置づけていきたい。【東又小 明神竜士教諭】

次回は 10 月 5 日 (金) 13 時 45 分から授業研究会を行います。文部科学省調査官 笠井健一先生と齊藤一弥先生との対談も予定していますのでぜひ、ご参加下さい。



主体的・対話的で深い学びを実現する 算数・数学の授業づくりを目指して!!



中部教育事務所